

2020年7月5日 説教「世界の民への祈り」

マタイの福音書 28章 16~20節

今朝は日本長老教会の世界宣教週間ですから、世界宣教に関する聖書箇所をとりあげて学んでいくことにいたします。

1. 弟子達の礼拝 (16~17節)



①ガリラヤの山で (16)「しかし、十一人の弟子たちは、ガリラヤに行

って、イエスの指示された山に登った。」十字架上での身代わりの死を遂げられたイエス・キリストは、三日目によみがえられました。マグダラのマリヤ他の女性たちや弟子達、また多くの人々に復活の主は現れてくださいました (I コリント 15:4~)。復活の主はまた、ガリラヤの地に弟子達を招かれたのです。弟子達もそれに応じて、エルサレムから 100 キロほど北のガリラヤに行き、イエスによって指定された山に登ったのです。そこにいたのが 11 人の弟子達とあります。そこにイエスを銀 30 枚で売ったイスカリオテ・ユダの姿がなかったのは言うまでもありません。

②キリストを礼拝 (17)「そして、イエスにお会いしたとき、彼らは礼

拝した。」ガリラヤの指示された山に行くと、お言葉通り、復活の主がそこにおられました。主に出会ったとき、弟子達は礼拝したのです。読み落としがちですが、この記述は新鮮です。というのは、弟子達はずっとイエス・キリストのあとについて、活動を共にしてきました。その教え、奇跡の御業に触れてきた弟子達ですが、彼らにとってキリストはとても身近な存在でした。お言葉を聞き、従い、時には戒められてやってきましたが、イエス・キリストを神として礼拝をさげるということは、ここで初めてなのです。

③ある者は疑い (17)「しかし、ある者は疑った。」

トマスは他の弟子達が復活の主に出会ったときに不在でした。後日、主が彼の前に現われた時に、「私の主、私の神」と告白しました。その時主は、「あなたはわたしを見たから信じたのか、見ずに信ずる者は幸いである」(ヨハネ 21:29)と言われました。トマスはキリストの復活の確信を与えられたことでしょうか。ですから、ここで疑った弟子が誰であるのかはわかりませんが、トマスではないでしょう。ともあれ、復活の主が目の前にいて下さっているのです。それでも、その弟子はまだ疑っていたのです。私たちも同じような存在かもしれません。

2. 復活の主のご命令 (18~19節前半)

①天と地の権威を (18)「イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。

『わたしは天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。』主は「わたしは天において、地においても、いっさいの権威が与えられている」と言われました。その道の権威と言われる人は、最高の知識と、その時になすべき最善の行動や行為を知

っています。天と地の権威者は、全知全能の神です。天地の創造者である方は、事柄の全てをご存知なのです。キリストはその権威を与えられていると、ここで明言されているのです。

②あなたがたは行って (19) **「それゆえ、あなたがたは行って、」** その権威に基づいて、主が弟子達に言われることは、あなたがたは「行きなさい」ということでした。つまり、行くべきところに踏み出して進みなさいと言われているのです。それは弟子達が、実を結ぶためでもあったからです (ヨハネ 15:16)。かつて、アブラハムはどこ

に
行くのか知らないで、行きなさいと言われ、それに従いました (創世記 12 章)。ここでも、この信仰を言っておられるのです。

③弟子とせよ (19) **「あらゆる国の人々を弟子としなさい。」** マルコの福音書には、「全世界に出て行き、福音を宣べ伝えよ」(16:15) とあり

ますが、マタイの福音書では「あらゆる国の人々を弟子とせよ」とあります。弟子 (マセーテース) という言葉は、学ぶ人という意味です。その地の人々をしてキリストを学ぶ人にしなさいと命ぜられているのです。「あらゆる国の人々」というのは、あらゆる部族、民

族といった意味にもなります。今日の国の区分以上のものです。

3. バプテスマと約束 (19 節後半～20 節)

①バプテスマを (19) **「そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け」** バプテスマとは洗礼のことです。主は、父、子、聖霊という三位一体の神の御名によって洗礼を授けるように命ぜられました。それはまた、信ずる者が三位一体の主によって生きていくことが示されているということでもあります。信じて弟子となることは、バプテスマを受けることにつながっていくのです。

②教えを守ること (20) **「また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。」** さらに、主が仰せられたことは、教えを守ることでした。数々の教え、ご命令があります。たとえば、「あなたがたは互いに愛し合いなさい」(ヨハネ 13:34) とありますが、教会の交わりにおいて、欠かせない教えです。そして、いまこの場所で伝えられたご命令を守ること大切であったことはいままでもありません。

③世の終わりまで (20) **「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」** キリストの慈愛に満ちたお言葉です。主は、キリストを見上げる者たちに、共にいるとお約束くださっているのです。それも「世の終わりまで」とあるからには、私たちが生きる限りはいつも、どんな場面においても共にいてくださるというのです。孤独な者も、失望落胆する者にも、いつもともにいてく

ださるのです。

《結論》今朝の聖書箇所のご命令は大宣教命令 (The great commission) と言われます。「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。」という御言葉に導かれて、海外宣教に向かった宣教師は少なく

ありません。パール・バックというノーベル文学賞を得た作家の父親は長老教会の宣教師で、一家は 1892 年頃から中国での宣教活動をしたのです。父親は宣教に駆け巡りました。パールは中国で育ちましたから、中国語も話せ、読めました。そのパールだからこそ、「大地」「龍子」などの中国社会を背景にした小説を記すことができたのです。パール自身もアメリカの大学などで学んだ後に、宣教師として中国に改めて向かっています。しかし、後年においては、海外宣教についての疑問を投げかけました。現地に生きる人々が必ずしも福音を必要としていないと思ったからです。しかし、その後の中国の歴史を見ていくと、中国共産党によって支配され、キリストの福音信仰を禁止された民の魂は渴き始めました。後に、福音が届けられるようになると、すごい勢いで福音は広がっていきました。このことは何を意味しているかといえば、福音はどの地の民も必要としているということです。ノーベル賞を取る程の知性が見る目とは異なるところで、キリストの愛の福音は届けられる必要があるという証明なのです。国内外を問わず、福音は魂に渴きを覚えている人々に伝えることが大切なのです。

このご命令は、信者がキリストの弟子となることの重要性を教えています。私は若い時代にある伝道団体の働きに加わっていました。その団体は、ここにある命令を受けて、キリストを信じるだけでなく弟子とすることを重視する働きをしていました。超教派の宣教団体として、教会の側面的働きをしていました。私自身はローマ 10:15 と、この後半のご命令「バプテスマを授けよ」という御言葉を召命の御言葉としていただき、牧師を目指して神学校に行ったのです。とはいえ、キリストの弟子養成はこの国にあっても、教会の大切な働きですから、その精神を受け継いでいきたいと願っています。さて、宣教団体を退いてからも、海外宣教への責務が私のなかにとどまっていた、日本長老教会の海外宣教委員会に長く関わってきました。「海外宣教報」に掲

載されている宣教師の方々と接する機会が時々あります。あの方々は不思議です。困難が予想されていても、主に促されてその働きに献身されるのです。それは人間の頑張りだとかではなく、神の召しなのだと思わされます。今朝はぜひ、そうした宣教師達のために、祈り

ましよう。また援助もしていきましょう。

この福音書最後の「わたしは、世の終わりまで、いつもあなたが
た
と共にいます」という御言葉ですが、外国にいる宣教師達はもとより、
現在の困難の中に生きるあなたへの慰めと励ましなのです。主がいつ
もあなたと共にいてくださるよう、祈ります。主があなたを導いてく
ださいますように。